令和3年1月1日発行／毎月1回1日発行／通巻983号／平成11年10月4日　第3種郵便物認可

総合演劇雑誌

テアトロ

1
2021

特集 コロナ禍の中での収穫と失敗

白川浩司／亀井奈緒／片岡哲也／野中友博
鈴木龍男／橘　麦／倉田　淳／谷仲恵輔

[書評]「日本演劇思想史講義」岡本　章

◉連載
共創する空間へ㊷　西堂行人
鈴木忠志論⑦　菅　孝行
旅する演出家㉕　流山児　祥

[エッセイ] 六回目「731 の幻想」の現場から　跡見　梵

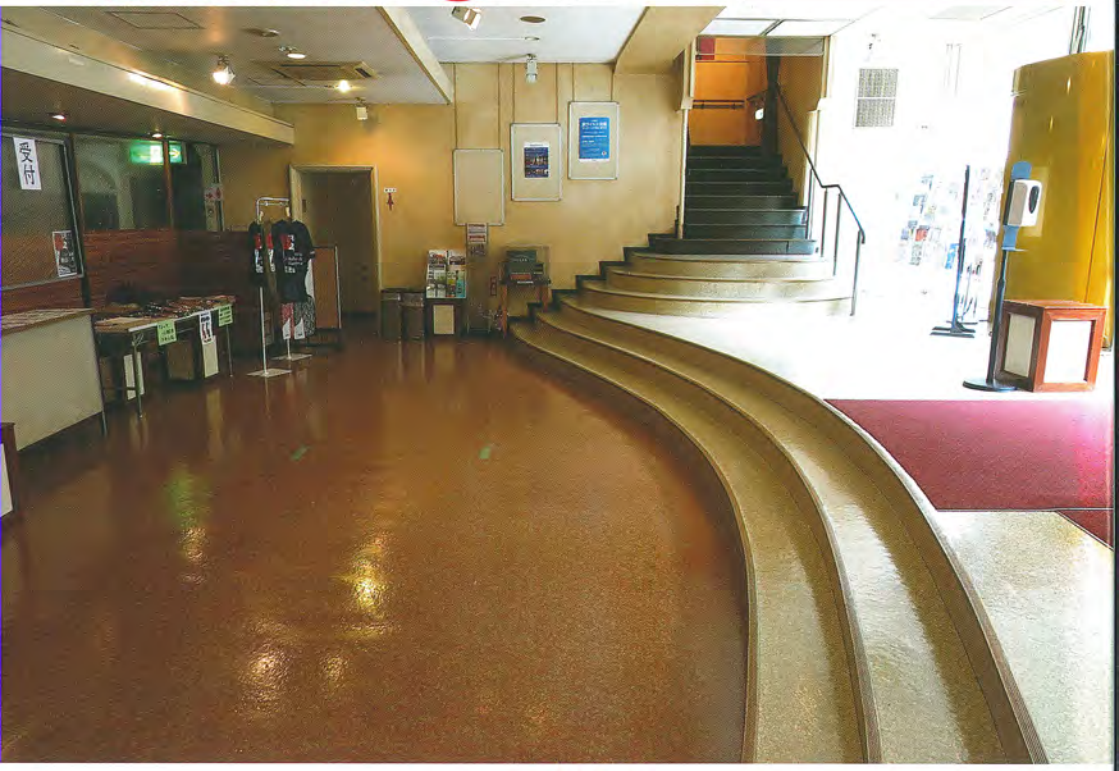
今月選んだベストスリー 317 林 あまり

第34回テアトロ新人戯曲賞募集

◆戯曲◆

祖国、遥かなり
～日印のかけ橋～

江原吉博



No. 983

critic

11月の関西

古典の再創造が現代に齎(もたら)す希望

木ノ下歌舞伎【糸井版摂州合邦辻】
清流劇場【逃げるヘレネ】
あごうさとし演出【ペンテジレーア】
朗読劇【雪間の草】

九鬼葉子

清流劇場が、エウリピデス原作『**逃げるヘレネ**』を上演（10月17日、大阪市の一心寺シアター倶楽で所見、田中孝弥構成・演出、丹下和彦翻訳・補綴）。トロイア戦争の原因とされるスパルタ王妃ヘレネの物語だが、伝説とは異なる内容。伝説では、ヘレネがトロイア王子と駆け落ちしたことが戦争の発端とされる。夫のスパルタ王が、妻を奪還するため遠征軍を起こしたと伝わるが、本作はその「異伝」。悪女ではなく、貞女のヘレネが登場する。

3人の女神の争いに巻き込まれたヘレネ（永津真奈）。奸計によりトロイア王子に差し出されそうになるが、ヘルメス神の計らいでエジプトに逃げ、夫への貞節を守る。彼女の代わりに、雲から作られたヘレネそっくりの幻がトロイア王子の妻になる。そうとは知らず、スパルタ王（高口真吾）は妻を取り戻すため、トロイア戦争を起こす。10年の戦争の末、妻を奪還するが、実はそれは幻のヘレネのほうだった。帰国途上、エジプトで本物の妻と再会し、驚く。妻は当地の新しい王と結婚させられそうになっていた。

最後は爽快な脱出劇で、無事故郷に向けて出発するハッピーエンド。悲劇ではないものの、悲運の王妃の物語を、喜劇として大胆に演出。ヘレネ役の永津真奈は、愛らしいコメディエンヌぶりを発揮。スパルタ王役の高口真吾も、エジプト王役の西田政彦も、デフォルメした演技で、三枚目男を造形。だが違和感はない。シンプルな白い舞台で展開された、小劇場版の古代ギリシア演劇は、現代的な風刺劇に仕上がった。

神々の定めた運命に翻弄されつつも、人間達が知恵を絞り、運命を切り開く様は痛快。夫婦の再会場面では、コロナ禍で抱擁できない分、「吹き戻し」（笛のおもちゃ）を挟んでキスをする様がかわいい。限定条件下での工夫が、かえっておもしろい表現を生んだ。

ヘレネの実体ではなく、その名のついた幻、畢竟ヘレネという「言葉」のために戦争に突入した男達の姿は、何を暗示するのか。私には、政治家の美辞麗句に幻惑される大衆（私を含め）の姿が重なって見えた。大阪市民として身につまされるのは、11月1日に迫った大阪都構想の住民投票。政治家の言葉は真実か、マジックか。市民がどんな判断を下すのか。現代とリアルに重なる、普遍性のある舞台（付記・大阪都構想の結果は否決。心底安堵）。